第2課　より良い世界のための青写真

【暗唱聖句】

「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。」レビ記 19章 18節

【日曜日・聞かれる神】

「主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。」出エジプト記3章7節

イスラエルの民は400年にもわたってエジプトで奴隷生活を強いられてきました。あり得ないような過酷な状況の中で、神様の救いの時を待たなければなりませんでした。しかし、決して神様は彼らを見捨てられてわけではありません。神様は、「わたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った」と言われました。これは私たち一人ひとりの人生においても同じことが言えます。神様が遠くに感じられるようなことがあったとしても、神様はいつもわたしたちを見つめ、苦しみも叫びも痛みも知っていてくださいます。だから、神様を信じて神様の時を待つことが求められているのです。

　神様はイスラエルの民の叫びを聞き、彼らを救うために圧倒的な力をもって直接介入されるのではなく、モーセという一人の人物を通して民を救う計画を持っておられました。そして、モーセに「あなたたちを苦しみのエジプトから、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む乳と蜜の流れる土地へ導き上ろうと決心した』と」（出エジプト記3章 17節）と言われ、大脱出の道が開かれることになるのでした。神様の時が来れば、道は必ず開かれるということです。しかも、「そのとき、わたしは、この民にエジプト人の好意を得させるようにしよう。出国に際して、あなたたちは何も持たずに出ることはない」（出エジプト記3章 21節）と、重労働の代償を受けることを約束されたのです。しかし、エジプトを脱出するなど不可能に思えることでした。だから、大きな信仰、神様に委ねてこの約束を信じる信仰が求められるのでした。神様は必ず道を開かれます。そのとき、わたしたちは神様にすべてを委ねる信仰が必要となることを覚えましょう。

【月曜日・十戒】

エジプトを脱出した後に、十戒が与えられました。自由のない400年にもわたる奴隷生活から解放された後に十戒が与えられたのは興味深いです。自由をどのように使って生きるのか、どのように生きたら本当の幸せを生きることができるのか、それらのことを罪との関わりの中で示されたのです。

十戒の原語の意味を正確に訳すと、「～してはならない」というように表現されていますが、 例えば、出エジ20：13「殺してはならない」であれば、原語では「あなたは決して殺さない」と言う強い否定形の言葉になります。そのニュアンスは「あなたは、わたしの愛する民であるから殺人などしない。するはずがない。どうして殺すようなことをするだろうか」というニュアンスです。したがってこれは命令というより、むしろ神様からのご自身の選んだ民に対する信頼をこめた愛の語りかけなのです。このように神様から信頼されていては、罪を犯せなくなる、そのような拘束力のある愛の発言なのです。

【火曜日・奴隷、寡婦、孤児、外国人】

「あなたは寄留者を虐げてはならない。あなたたちは寄留者の気持を知っている。あなたたちは、エジプトの国で寄留者であったからであ」出エジプト記23章 9節

苦しい経験をすると、同じ苦しみの中にある人の気持ちがわかるものです。イエス様が神の御子であるにも関わらず、わたしたちと同じ姿となり、過酷な人生を歩まれたのは、わたしたちの苦しみを知り、理解し、同情してくださるためでもありました。わたしたちも人生において辛い時期を通らされることがあります。しかし、そこにも神様のご計画があり、その一つが、同じ境遇にある人に対して優しく接っしてあげられるようにということなのかもしれません。

「寡婦や孤児はすべて苦しめてはならない。もし、あなたが彼を苦しめ、彼がわたしに向かって叫ぶ場合は、わたしは必ずその叫びを聞く。そして、わたしの怒りは燃え上がり、あなたたちを剣で殺す。あなたたちの妻は寡婦となり、子供らは、孤児となる」出エジプト22：22，23

神様は寡婦や孤児など、弱者に対して優しく接するように言われています。それだけでなく、もし彼らが苦しくて叫ぶなら、その叫びを聞き、怒りが燃え上がり、剣であなたたちを殺すとまで言われています。イエスラエルの民は奴隷として酷い目に合ってきて、それがどれほどの苦しみであったかがよくわかっているはずです。それなのに、もし同じ苦しみの中で叫ぶものに同情できないとするなら、何のために奴隷状態を許されたのか。同じ境遇にある人たちに対して、自分たちも苦しい状況を我慢したのだから、あなたたちも我慢しなさいと言う人もいるでしょう。しかし、神様が期待しておられるのは、同じ苦しみを理解できるからこそ、その人を助け、愛を表すことなのです。

【水曜日・第二の什一】

「十分の一の納期である三年目ごとに、収穫物の十分の一を全部納め終わり、レビ人、寄留者、孤児、寡婦に施し、彼らが町の中でそれを食べて満ち足りたとき」申命記26：12

神様は三年目ごとに什一を貧者の救済のために集めるようにとお命じになられました。これは神様の働きのために毎年献げられる什一とは全く別のもので、通常の什一に加えられるものであり、それゆえ第二の什一と呼ばれています。この目的は、貧者を助け、彼らが満ち足りて、共に喜ぶためです。まさにこれは神様の御心であり、神様の御心を生きる喜びが信者の中に生まれます。しかし実際には、裕福なユダヤ人たちはこの親切、愛、憐れみの掟を守らないで、逆に貧者の需要につけ込み、物品の実際の値段のほとんど二倍もの法外な値で売っていたようです。

【木曜日・ヨベルの年】

ヨベルの年とは、7年ごとに土地を休ませる安息年が7回巡った次の年、つまり第50年目の年を指します。第49年目の年の第7月の10日（贖罪の日）に角笛を鳴り響かせ、ヨベルの年の到来（来年）を告げます。ヨベルとは、「雄羊の角」という意味です。ヨベルの年には、

1. 畑の休耕…畑の休耕では収穫がゼロになりますから信仰が求められます。特にヨベルの年は7年ごとの休耕に引き続きなので2年休耕となります。しかし、第6年目に3年分の収穫を生じさせると約束されました（レビ記25：21〜22）。
2. 売却されていた土地の返還…土地は神に属するものであり、人はそれを預託されているに過ぎません。買い戻しの権利が認められていたほか、余裕がない場合でも、ヨベルの年にはその土地は無償で売主のもとに返されました。
3. 奴隷の解放などが行われました。

ヨベルの年の規定は、社会の平等のためでした。これが実際に守られたのか確かではありません。しかし、神様の御心が何であるかははっきりとしています。